白居易の「序洛詩」と『文集』六十巻

―編み直された隠棲意識とその背景―

柳川　順子

はじめに

白居易（七七二―八四六）はその晩年、東都洛陽で悠々自適の生活を送ったと言われる。だが、閑職に就きながら、生々しい中央官界の情況とは一定の距離を置く、自らが「中隠」（『白氏文集』巻五十二、二二七七詩）と称したその半隠遁的生活に、彼は必ずしも徹頭徹尾、平静な心境を保持し得ていたわけではないらしい。そうした示唆を投げかけてくるのは、この時期、彼自身によって為された幾度かの作品編成のあり方である。

白居易は刑部侍郎の職にあった五十八歳の年（八二九）の春、前年末からの百日の病気休暇を経た後に、長安から洛陽へ、太子賓客分司として赴いた。そして、その五年後に当たる大和八年の夏、洛陽での詩四三二首をまとめ、それに「序洛詩」（巻六十一、二九四二）と題する序文を付した。ところがその翌年、江州の東林寺に奉納された『白氏文集』六十巻には、この詩群の一部しか収められていないし、その序文もまた未収録である。なぜだろうか。また、「序洛詩」において総括された一連の洛詩の中には、敢えてその成立の日付が明記され、記念碑の如くある巻の頭に置かれるものも少なくない。こうした編成態度には、白居易の心的磁場のようなものを感受せずにはいられないが、では、具体的にそれはどのような思いであったのだろうか。本稿は、こうした疑問を糸口に、洛陽隠棲をめぐる白居易の意識の推移とその背景について、私なりの一試論を提示しようとするものである。

一

大和八年（八三四）七月十日の日付を刻する「序洛詩」は、この時点での白居易の心境をどのように伝えているだろうか。まず、大和三年春以来、五年間の洛陽生活で

詠じた四百三十二首の詩について、彼は次のように記している。

除喪朋・哭子十数篇外、其他皆寄懐於酒、或取意於琴、閑適有餘、酣楽不暇、苦詞無一字、憂歎無一声。豈牽強所能致耶。蓋亦発中而形外耳。

朋を喪ひ、子を哭する十数篇を除きての外、其の他は皆懐ひを酒に寄せ、或いは意を琴に取り、閑適に餘り有り、酣楽に暇あらず、苦詞は一字も無く、憂歎は一声も無し。豈に牽強の能く致す所ならんや。蓋し亦た中に発して外に形はるるのみ。

否定形や反語を畳み掛ける措辞は、ここに打ち消された苦しみの言葉や憂い嘆きが、嘗て彼の意識の中にまぎれもなく存在していたこと、そして、そうした悲痛を意志の力で撓め、のびやかな楽しみの詩に変換させたのがこれらの洛詩なのだということをありありと窺わせる。だが彼は、言葉に表れ出たその逸楽的詩風を、「毛詩大序」（『文選』巻四十五）にいう「情動於中、而形於言（情は中に動きて、言に形はる）」を踏まえて、衷心からの自然な感情の発露なのだと表明する。

「詩序」に則った詩精神は、洛詩の編成、及び「序洛詩」執筆の動機について、更に次のような言明をも導き出している。

予嘗云、治世之音安以楽、閑居之詩泰以適。苟非理世、安得閑居。故集洛詩別為序引、不独記東都履道里有閑居泰適之叟、亦欲知皇唐大和歳有理世安楽之音。集而序之、以俟夫採詩者。

予は嘗に云ふ、治世の音は安んじて以て楽しみ、閑居の詩は泰らかにして以て適す、と。苟くも理まれる世に非ざれば、安んぞ閑居を得んや。故に洛詩を集めて別に序引を為るは、独り東都履道里に閑居泰適の叟有るを記すのみならず、亦た皇唐大和の歳に理世安楽の音有るを知らしめんと欲するなり。集めて之に序し、以て夫の採詩の者を俟つ。

このように白居易は、「毛詩大序」にいう「治世之音安以楽、其政和（治世の音は安らかにして以て楽し、其の政の和すればなり）」云々の説を踏まえ、今の大和の世の政が、和やかで安定した状態にあることを賛美するために、我が洛詩を集め、別にこの序文を著すのだと述べている。

アーサー・ウェーリーの論ずるとおり、宦官勢力の跋扈する当時の朝廷の現実を思えば、こうした言明はたしかに「あきらかに不誠実なものであった」と言わざるを得ない。だが、今はこのことは措いておこう。そして、大和八年七月の時点における白居易が、このように自らの隠棲を意識的に自己肯定しようとしていることにのみ

注意を向けておこう。

二

「序洛詩」の成立から約一年後の大和九年（八三五）夏、白居易は「前後に著す所の文、大小合して二千九百六十四首をば、勒して六十巻と成し」（巻六十一、「東林寺白氏文集記」二九四八）、かつて謫居生活を送った江州の、東林寺経蔵中にこれを納めた。現在、この六十巻本そのものは伝存していないけれども、その輪郭は、『白氏文集』の最良の刊本の一つ、那波本においてたどることが可能である。

というのは、那波本は、白居易手定本の原型を留める、いわゆる前集後集型の刊本であるが、岡村繁氏の所論[31]によると、その現刊本の源流と目されるのは、煎じ詰めたところ、他ならぬ廬山東林寺に奉納された七十巻であり、この東林寺本は、上述の六十巻に、後年（八四二）追納された後集十巻を加えたものだと推定されるからである。ならば、現存する那波本の巻六十までの部分を、失われた東林寺第一次奉納本六十巻にほぼ相当するものと見ることができるだろう。実際、先の「東林寺白氏文集記」に示された二九六四首という作品数は、那波本巻六十までの収録作品数、二九三七首に比してそれほど大きな齟齬はないし、また、収録作品の成立年から見ても、一篇の散文「東都十律大徳長聖善寺鉢塔院主智如和尚荼毘幢記」（巻六十、二九三七）が、開成元年（八三六）の作と推定されている他は全て、六十巻本の成った大和九年以前に成立していたと見られるものばかりである[32]。もちろん、両テキストを同一視することはできないが、両者間の食い違いは、おおむね誤差の範囲内と見てよい程度であり、それはおそらく東林寺本の成立後、波乱万丈の流伝の過程で生じたものだろう。そこで、幾らかの差錯はあると認識した上で、以下、那波本と東林寺本とをほぼ同等のものと看做して話を進めてゆく。

さて、前章で見た「序洛詩」では、大和三年の春から八年の夏に至るまでの洛詩を四三二首と記していたのであったが、那波本全巻について、この時期に成立したと推定されているものを数え上げてみると[33]合計四六〇首となり、この数は白居易自らが記していた先の作品数を十分に包摂する。「序洛詩」に示された詩のほとんど全ては、現存する『白氏文集』の中に伝わっていると見てよいだろう。

ところが、これを巻六十までに限定して調べてみると、その二七七首までしか収録されていない。つまり、「序洛詩」が書かれた翌年、大和九年時点での集大成であったはずの第一次東林寺奉納本六十巻は、洛詩のうちの一五〇首余りを落としているのである[34]。この数は、たまたま漏れたとするにはあまりにも多い。更に、洛詩を集めた

趣旨を述べた「序洛詩」も、この六十巻本には未収録である。これらの詩文が、東林寺への第一次奉納の前年には既に成立していたこと、また、「序洛詩」に読み取れるように、この詩群がある格別の思いから一つにまとめられたのであるらしいことを考え合わせると、これはなんとも不可解な編集だと言わざるを得ない。

しかも、その詩の採録基準はきわめて明瞭であって、大和六年と七年との間に一線を画するというのがそれである。最近の作が一律に採られなかったのは、あるいは編集や筆写の作業に間に合わなかったためではないかとも考えられるかもしれない。けれども、追納分の後集十巻、すなわち那波本の巻六十一から巻七十までの間ではそうしたことは認められないし、また、散文においては、大和八年の作と推定されている「大唐泗州開元寺臨壇律徳徐泗濠三州僧正明遠大師塔碑銘并序」（二九三六）が巻六十に収録されている事実もある。そうである以上、白居易は東林寺第一次奉納本六十巻の編集において、意図的に時期を区切って詩の取捨を決したのだと見るほかないだろう。そして、この編集方針には、彼自身の何らかの強い思いが作用していると考えるべきだろう。

三

白居易は、大和九年の夏、江州の東林寺に奉納した文集六十巻に、大和六年（八三二）までに成った詩のみを収め、七年以降の作は採っていない、と先に述べた。だが、少数ながら例外もあって[三]、それらは全て、大和六年の作と推定されていながら、この東林寺第一次奉納本に収録されていないというケースである。とすると、そうした作品の中に、取捨の境界線をより明瞭に見極める手がかりが蔵せられているかもしれない。そこで、まず取り上げたいのが、巻六十四の頭に置かれた「六年冬暮、贈崔常侍晦叔（六年冬の暮れに、崔常侍晦叔に贈る）」詩（三〇五二）である。

鬢毛霜一色　鬢毛は霜と色を一にし、
光景水争流　光景は水と流れを争ふ。
易過唯冬日　過ぎ易きは唯だ冬日のみ、
難銷是老愁　銷し難きは是れ老いの愁ひなり。
香開緑蟻酒　香しく開く　緑蟻の酒、
煖擁褐綾裘　煖かく擁す　褐綾の裘。
已共崔君約　已に崔君と共に約せり、
樽前倒即休　樽前に倒れなば即ち休まんと。

一見したところ、このように何の変哲もない投贈詩である。ただ、この詩題には大和六年十二月末という時が刻まれていて、その題辞の下には「時に河南尹為り」との自注も見えている。二首を置いて「七年元日対酒五首

（七年元日、酒に対す　五首）」が続くことからすれば、その間に置かれた「戯招諸客（戯れに諸客を招く）」詩（三〇五三）、「十二月二十三日作、兼呈晦叔（十二月二十三日に作り、兼ねて晦叔に呈す）」詩（三〇五四）も同時期の作と判断されるが、これら一連の詩の題においても日付の明記が殊更に目立つ。巻六十四は、こうした詩に始まるように編成されているのである。これらの詩は、その内容が生臭い時事に触れることは一切ない。だが、それが作られた背景を示す題辞には、上述のとおり細かく日付が刻印されている。白居易は、この大和六年の年の暮れという時点に、何かよほどの思いを込めて楔を打ち込もうとしているらしい。

ところで、この詩が贈られた崔玄亮（七六八―八三三）、字は晦叔は、貞元十六年（八〇〇）、ともに進士科に及第して以来の白居易の旧友であるが[12]、特に洛陽隠棲時代初期の白居易にとって、彼はかなり大きな存在であったようだ。その親愛の情は、大和三年（八二九）に誕生した初めての男の子に崔児と名付けていることからも窺えよう[13]。その崔玄亮の、この時期における事跡を大まかに述べれば、白居易が刑部侍郎を辞職して、太子賓客として洛陽に分司したのと同じ大和三年、彼もまた曹州刺史を辞職して洛陽に遊び、その後まもなく長安に召されて太常少卿、諫議大夫、散騎常侍などを歴任し、邪臣鄭注に陥れられて冤罪を被った宋申錫を弁護するなど、高級官僚としての信義に賭けてその職務を全うしたが、大和六年十二月、太子賓客として再び洛陽へ戻っている[14]。この間、白居易は彼の知音として、ある時は閑遊を共にし、またある時はその都での消息を見守り続け、崔玄亮が洛陽に帰ってきた時には、万感の思いを込めて再び彼を迎え入れ、その辛苦をねぎらっている。白居易の彼に向けられた思いは、たとえば、多忙な友人たちとの対比において自分たちの超俗的風流心を詠じた「同崔十八寄元浙東王陜州（崔十八と同に元浙東・王陜州に寄す）」詩（二七三〇）や「同崔十八宿龍門、兼寄令狐尚書馮常侍（崔十八と同に龍門に宿し、兼ねて令狐尚書・馮常侍に寄す）」詩（二七四七）、長安へ旅立つ彼を見送る「臨都駅送崔十八（臨都駅にて崔十八を送る）」詩（二七五一）や「雨中訪崔十八（雨中に崔十八を訪ふ）」詩（二七五三）、また、彼の洛陽帰還の知らせを受けて真っ先にその別荘の泉石に報告したという「題崔常侍済上別墅（崔常侍の済上の別墅に題す）」詩（二八〇一）、そして、帰ってきてからの彼を歓待する「贈晦叔憶夢得（晦叔に贈り、夢得を憶ふ）」詩（二九〇九）や「酔後重贈晦叔（酔後、重ねて晦叔に贈る）」詩（二九一〇）などに、その心情の細やかな揺れをも含めて読み取ることができる。

さて、崔玄亮が洛陽に戻ってきたのは、『白氏文集』巻五十一所収の「答崔賓客晦叔十二月四日見寄（崔賓客晦叔が十二月四日に寄せられしに答ふ）」詩（二二四七）に

より、大和六年十二月上旬であることが知られるが、巻五十八に収める前掲の二九〇九、二九一〇詩は、洛陽到着後の崔玄亮に贈られたものであるから、両詩の制作時期はそれより更に年末に迫るはずだ。とすると、これら二首の詩と先に見た三〇五二詩とは、その成立が一箇月の開きさえもない計算になる。ところが、一方は六十巻本に収められ、一方は第二次奉納本である後集十巻に至って初めて収載されている。これはなぜだろうか。もしも巻六十四所収の三〇五二・三〇五四詩が、崔玄亮との旧交をあたためる趣旨でのみ作られたものだとするならば、上述の巻五十八所収詩と同等に按配されるのが順当ではあるまいか。ところが、これらの詩は追納本に回され、わざわざ日付が明記された上で、そのある一巻の初めに置かれている。こうした編成姿勢からは、大和六年十二月末という時点に、ある特別な意味を持たせようとする白居易の意志を感受することができるだろう。そして、これらが崔玄亮への投贈詩であることは、この時の思いを分かち合える唯一の友として、彼が白居易の傍らにいたということを示しているだろう。

それでは、この時、白居易の心中を占めていたのは何だったのか。結論から言えば、それはおそらく、彼と親しい間柄にあった牛僧孺（七八〇―八四八或八四九）が宰相の職を辞任するという出来事であったと思われる。『旧唐書』牛僧孺伝によると、当時の朝廷は、宦官王守澄が佞人たちとの密議によって時政を私し、文宗は左右の邪説に惑わされているといった状況で、李訓や鄭注のごとき奸臣がその間隙をついて頭角を現し得たのも、このような背景があったからこそであるという。牛僧孺はそうした長安の官界につくづく愛想を尽かして退任を申し出、大和六年十二月七日、念願が叶って淮南節度使に任命されたのであった（『旧唐書』文宗紀下）。なお、牛僧孺の離任後、彼のライバル李徳裕（七七九―八四七）が兵部尚書として長安に帰還し、まもなく宰相となっているが、彼もまた迷走する朝廷の状況に対してずいぶんと奮闘した様子である。[19]

さて、大和六年の作と推定されていながら、大和九年成立の文集六十巻に収められなかったもう一首の詩が、実はこの出来事に直接起因して作られた「洛下送牛相公出鎮淮南（洛下にて牛相公の出でて淮南に鎮たるを送る）」詩（三〇六二）である。もっとも、牛僧孺が淮南節度使を拝命してから出立するまでの時間、及び長安から洛陽までの旅程などを考え合わせると、その成立時期は大和七年一月初め頃まで下る可能性もあるだろう。本詩は巻六十四に、前掲の三〇五二詩に始まる一連の作品群に続けて、大和七年元日の詩よりも後に収載されている。では、まずその本文を提示しよう。

北闕至東京　　北闕より東京に至るまで、

風光十六程　風光　十六程。
坐移丞相閤　坐して丞相の閤を移し、
春入広陵城　春には広陵の城に入る。
紅旆擁双節　紅旆　双節を擁し、
白鬚無一茎　白鬚　一茎も無し。
万人開路看　万人　路を開きて看、
百吏立班迎　百吏　班に立ちて迎ふ。
閫外君弥重　閫外に君は弥重く、
樽前我亦栄　樽前に我も亦た栄とす。
何須身自得　何ぞ須ひん　身自ら得るを、
将相是門生　将相は是れ門生なり。

本詩の末尾には、「元和初、牛相公応制策、登第三等、予為翰林考覈官（元和の初め、牛相公　制策に応じ、第三等に登りしとき、予は翰林考覈官為り）」との自注が見え、元和三年（八〇八）[9]、牛僧孺が制科に及第した時、白居易は翰林学士として試験官を務めていたことが知られる。この時の及第者たちは、時政を厳しく批判するその答案により、宰相李吉甫から、地方へ追放されるなどの冷遇を被って（『旧唐書』李宗閔伝）、これが後の牛李の党争の発端となったのであったが、この時の考査に白居易が当たっていたということは、二人は師弟関係に等しい、かつまた同志とも呼び得る間柄であったと言えるだろう。これとは別に、牛僧孺は官界において、白居易の妻の兄たち、楊汝士や楊虞卿らと朋党関係を結んでいたが[10]、白居易はこの種のことには一切触れず、上述のような公的な間柄にのみ敢えて言及している。こうした姿勢に、白居易が牛僧孺との関係性をどう捉えようとしていたかが窺えるが、この門下生であり同志でもある人物が中央官界を去って淮南へ赴くのを、洛陽で誇らしげに見送っているのが本詩なのである。

この詩に表明された牛僧孺への誇らかな敬意は、先に述べた崔玄亮へのねぎらいと同じ根に発していると見ることができるだろう。なぜならば、この二人が戦い、敗れた相手はいずれも同じ、堕落し腐敗しきった当今の朝廷であったからだ。牛僧孺を洛陽で見送るに先立って、白居易は必ずやその詳しい消息を聞き知っていたに違いない。もちろん、最近まで長安にいた崔玄亮も同様に。だからこそ白居易は、牛僧孺が長安を去るに至った状況への憂憤や苦い諦観を言外に込めて、肝胆相照らす友、崔玄亮に先の詩を贈ったのではなかったか。それが一見、淡々とした閑適の詩であったとしても、その行為に込められた思いは強い。

四

東林寺第一次奉納本六十巻に採られなかった洛詩は、大和六年（八三二）末以降、白居易の中央官界への失望

が決定的になった時期の作だと言えそうだ。その多くが日々の穏やかな楽しみを詠ずるこの時期の詩群は、実は苦い敗北感と背中合わせで詠じられたものであった。それが、大和九年夏という時点での集大成から落とされている。そこに、洛陽隠棲に対する、白居易自身の意識の変移を読み取ることができるだろう。ただ、これらの洛詩は、それが詠じられた当初から、こうした特別な文脈の中に置かれていたわけではなかった。このことは、大和三年の春から八年の夏までの洛詩を一括する、前掲の「序洛詩」の存在が証明している。とすると、白居易の中に、大和六年末という時点を一つの区切り目とする意識が立ち上がったのは、「序洛詩」が書かれた大和八年の秋から、江州東林寺に文集六十巻が奉納された大和九年の夏までの、ある時期においてであったということになる。それではこの間、彼の意識に変化を迫るような、何らかの出来事が起こったのだろうか。

結論から言えば、これもまた白居易をめぐる官界の情勢と深く関わることであったように推察される。すなわち、前章で言及した牛僧孺と同じ年に制科に及第し、以来官界での運命を彼と共にしてきた李宗閔（？―八四六）が、ちょうど「序洛詩」が書かれた直後に当たる大和八年九月、長安に召還され、次いで宰相となっているのである。この符合は、偶然として無視し去るにはあまりにも画然としている。そのことを示すために、主として『旧唐書』李宗閔伝に拠りながら、ここに至るまでの牛党の事跡を、白居易の詩作や編集の経緯と照らし合わせて見ていこう。

まず、李宗閔は、この時点から数年を遡った大和二年（八二八）に吏部侍郎となり、翌年に同平章事となって以降、牛僧孺と共に朝廷の枢機に携わったが、これは、白居易が洛陽隠棲を思い立ち、実行し、その閑適の思いを詠じた、六十巻本所収詩の成立時期と重なっている。[18] その後、前述のとおり大和六年末に牛僧孺が外任に赴き、翌年、入れ替わりに李徳裕が中央官界に帰還すると、李宗閔もまた同年六月、興元尹・山南西道節度使に出され、以降しばらくは李党の天下となったが、この間は、白居易がその六十巻本に採録しなかった洛詩諸篇、及び「序洛詩」の成った時期と重なっている。要するに、東林寺第一次奉納本所収の洛詩は、いわゆる牛党が権力を握っていた時期の作であり、李徳裕ら李党が官界の中枢を占めていた期間の作は、そこから落とされているということだ。そして、こうした編集が、ちょうど李宗閔の中央復帰と重なる時期に行われているのである。先にも触れた「東林寺白氏文集記」によると、東林寺への文集の奉納は経年の約束事ではあったが、それでも期限を設けての依頼ではなかったようであるから、この時期における文集六十巻の編纂は、彼自らの意志によるものと見てよいだろう。

ならば、李宗閔の復活によって呼び覚まされた白居易

の意識とは何だろうか。直前に書かれた「序洛詩」では、

今の世を平安と思い定め、屈託する憂いや悲しみを閑適の喜びに転換させようという覚悟が示されていたのであったが、彼を静かな諦観へと導いた、李徳裕の主導する官界の状況は一転し、自身にとって無関係ではいられない、牛党の李宗閔が中央に復帰してきたのである。こうした情勢の変化は、彼の中にかつての危機感を生々しく蘇らせたに違いない。それは、大和二年末から点滅し始めた不吉な予感、すなわち、官界の有力者との間に逃れられない人間関係を持つが故に、その意に反して、自らが思い描く「兼済」とは何ら関わりのない、不毛な権力闘争に巻き込まれるのではないかとの憂慮である。

そう示唆するのは、まず李宗閔が都に返り咲いた経緯である。『旧唐書』本伝によると、前述の牛僧孺と入れ違いに長安へ帰還した李徳裕は、その厳しい刺譏が奸臣邪臣に疎まれ、そうした連中の意向により、文宗は李徳裕の政敵である李宗閔を召還することにしたのだという。この種の人間たちが織り成す情況の危うさを、白居易が見抜けなかったはずはない。[19] 事実、ちょうどこの時期、彼は李宗閔に向けて、その招聘に対する謝絶と読める詩を書き送っている。次に挙げる「寄李相公」（巻六十五、三一九九）がそれである。

漸老只謀歓　　漸く老いては只歓を謀るのみ、
雖貧不要官　　貧しと雖ども官を要めず。
唯求造化力　　唯だ造化の力を求め、
試為駐春看　　試みに春を駐めて看んことを為さん。

大和九年の夏に完成する東林寺第一次奉納本六十巻の編纂は、このような情況下で行われていったのであった。白居易が現時点での集大成からある時期の詩を除外したのは、上述のごとき危機意識と深く関わるものであったと推測されよう。

このことは、翌年の開成元年（八三六）、洛陽の聖善寺に文集六十五巻が奉納されたことからも裏付けられる。この本は伝存しないが、増加した五巻という分量から考えて、そこには必ずや、先には落とされた洛詩一五〇余首が含まれていたに違いない。ならば、この一年間に、再び白居易の意識を変える何かが起こったのだろうか。そこで、この間の官界の情勢を概観してみると、李宗閔は結局、同じ牛党の仲間、楊虞卿の罪を庇って明州刺史に出され、白居易の義従兄である楊虞卿もまた南方の虔州に放逐され、大和九年九月の詔では、李宗閔・李徳裕の朋党は、既に放黜されたものを除いて一切その罪が不問となった（『旧唐書』文宗紀下、李宗閔伝、楊虞卿伝）。一方、白居易はこの頃、義兄楊汝士の後任として同州刺史に任命されたが就かず、翌十月、太子少傅を拝命している（『旧唐書』文宗紀下）。「詔授同州刺史、病不赴任、

因詠所懐（詔ありて同州刺史を授けられしも、病みて任に赴かず、因りて所懐を詠ず）」詩（巻六十五、三二二四）によると、長安新昌里の自宅[20]を手放したのは、ちょうどこの時期のことであったようだ。そして、白居易の知人たちも巻き込まれた甘露の変は、それから間もない同年十一月の出来事である。白居易は先見の明により、自身に降りかかる可能性のあった災厄を、全て未然に防いだのである。

さて、こうした時期を潜り抜けて、聖善寺本六十五巻は成った。この開成元年という時点での白居易は、自らの集大成に、大和六年末以来の洛詩を収録しても大丈夫だと判断したのである。ひるがえって前年、東林寺本六十巻の編成においては、牛李の党争を始めとする当時の官界の混乱をにらみつつ、二百首近くの洛詩をそこから落としたということだろう。想像するに、六十巻本編纂当時の白居易は、まさしく大和二年末以来の危機意識の中にあった。静かな諦念の中で、自身の逸楽と天下泰平とを言祝ぐ、大和六年末以降の閑適の詩は、にわかに権力の座に返り咲いた李宗閔などにどのような誤解を与えるか知れたものではない。かくして、その時点での集大成六十巻から、それらは用心深く一律に取り払われたのである。もしかしたら、彼の意識のどこかには、今の世の心ある人々、そして、いずれ自分の文集を繙いてくれるであろう後世の人々に向けて、この今現在の情勢に対する自分なりの意思表示をしておきたいという思いもあったのかもしれない。

むすびにかえて

人は日々を生きるとき、必ずしも今現在の行為や思索を俯瞰的に意味づけることはしない。そうした予見が天啓のごとく訪れる瞬間もないではないが、大抵は日常の中で浮かんでは消えてゆくのが日々の言動である。今というこの時が、後の自らの軌跡にどのような位置を占めることになるのか、その認識は多く後から追ってやって来るのだし、また、一旦は定着したかに見えたその意味が、自らの内で書き換えられてゆくこともしばしばだ。白居易の晩年の詩は、そのように幾重にも編み直された文脈から読み解くことが必要なのだと私は考える。

本稿では、東林寺第一次奉納本六十巻から一部の洛詩が落とされていることに焦点を絞って考察してきたが、このような編集を為した白居易の意識は当然、この六十巻本に収録された洛詩にも及んでいる。たとえば、「戊申歳暮、詠懐三首」詩（二七一三―二七一五）に始まる巻五十七の冒頭部分は、中央官界を離れ、東都分司へ退こうと思い立ってから、洛陽に着任するまでの過程が手に取るように分かるよう配列されているが、この詠懐詩の成った大和二年末から、翌年春に洛陽へ向けて出立する

までの病気休暇中の作、たとえば「酬令狐相公春日尋花見寄六韻(令狐相公の春日花を尋ねて寄せられしに酬ゆ、六韻)」詩(巻五十六、二六四六)などが同巻に収められていないのはなぜだろう。また、洛陽に至る道中での作は、巻五十五にも「京洛」詩(二五九〇)に始まる一連の作五首が見えているが、これらの詩はなぜ巻五十七に収録されていないのか。更に、巻五十七と巻五十八とは、その所収詩の成立時期が重なり合っているが、同時期の作品を、なぜ白居易はこのように巻を分かって収載したのか。こうした疑問を解き明かした先には、本稿で論じたことと繋がるものを必ずや見出すことができるだろう。この続きは、また稿を改めて論じたい。

注

(1)作品番号は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』(一九六〇年、彙文堂書店)所収「綜合作品表」に拠る。以下同様。

(2)洛陽時代の白居易が抱えるこうした一側面に目を留めた論として、下定雅弘「宰相になれなかった白居易」(一九九六年、勉誠社刊『白氏文集を読む』所収。初出は『中国文化論叢』第四号、一九九五年)がある。また、アーサー・ウェーリー著・花房英樹訳『白楽天』(一九五九年、みすず書房)の三七三頁以降には、この時期の白居易の足跡と周辺の状況が詳細に述べられている。

(3)白居易の事跡については、朱金城『白居易年譜』(一九八二年、上海古籍出版社)を手引きとした。

(4)この対句は、白居易の他の作品には見えていない。したがって、川合康三『白楽天―官と隠のはざまで』(二〇一〇年、岩波新書)二〇一頁に示された読みのごとく、「嘗」は「つねに」と訓じ、日頃から口にしていた語と見るのが妥当だろう。

(5)川合前掲書は、一九九―二〇九頁で「序洛詩」を取り上げ、「毛詩大序」との関わりにも論及している。

(6)アーサー・ウェーリー前掲書三八二頁を参照。

(7)岡村繁「『白氏文集』の旧鈔本と旧刊本」(『東方学会創立五十周年記念　東方学論集』(一九九七年、東方学会)を参照。

(8)花房前掲一覧表に拠る。

(9)花房前掲書、及び朱金城『白居易集箋校』(一九八八年、上海古籍出版社)を踏まえた下定雅弘「白居易作品編年一覧」(前掲『白氏文集を読む』所収)に拠って算出した。ただし、大和八年の作に関しては、その詩の成った季節まで特定することが困難であったため、一律に洛詩の中に繰り込んだ。

(10)花房前掲書は、「序洛詩」にいう詩は基本的に全て六十巻本に流れ込んでいると捉えている(二三―二四頁)。埋田重夫『白居易研究　閑適の詩想』(二〇〇六

年、汲古書院）もこれを襲っているようだ（三四七―三四八頁）。だが、本文の下文でも論及するとおり、六十巻本成立の翌年、洛陽の聖善寺に六十五巻本が奉納されており、この増加した五巻分は、一年間で作られた作品、あるいは遺漏の追補と見るにはあまりにも大量である。それよりは、六十巻成立の段階で落とされた詩があると見る方がはるかに自然であろう。

(11)本文中に言及した三〇五二、三〇五三、三〇五四、三〇六二詩以外に、「重修香山寺畢、題二十二韻以紀之」詩（巻六十四、三〇八四）、「初入香山院対月、大和六年秋作」詩（巻六十六、三二七四）の二首がある。

(12)徐松『登科記考』巻十四を参照。なお、『旧唐書』本伝は崔玄亮の進士及第を貞元十一年と誤る。

(13)「阿崔」詩（二八二五）、「和微之道保生三日」詩（二八六二）、「初喪崔児、報微之晦叔」詩（二八八一）などによって知られる。いずれも巻五十八所収。

(14)『旧唐書』文宗紀下、同崔玄亮伝、及び「唐故虢州刺史贈礼部尚書崔公墓誌銘并序」（巻六十一、二九四〇）などに拠る。

(15)傅璇琮『李徳裕年譜』（一九八四年、斉魯書社）二五四―二九二頁を参照。

(16)謝思煒『白居易詩集校注』（二〇〇六年、中華書局）二三五六頁を参照。

(17)徐松『唐両京城坊考』巻三によると、牛氏宅は楊氏兄弟の住む靖恭坊の南に隣接する新昌坊にあって、楊虞卿が牛氏宅の墻東に建てた南亭は、朋党衆議の場として隆盛を極めたという（『続談助』巻三に引く『牛羊日暦』、『南部新書』己集）。

(18)白居易の洛陽引退が牛派の動向に連動することは、アーサー・ウェーリー前掲書三七三頁に夙に示唆されている。

(19)かつての経験から来るこうした覚醒は、たとえば「戊申歳暮、詠懐三首」其三（巻五十七、二七一五）にありありと読み取れる。

(20)白居易が、長慶元年（八二一）、牛氏宅と同じ新昌坊に家を購入したことは「卜居」詩（巻十九、一二二九）に見えている。彼がこの家を手放した理由をも含めて、妹尾達彦「白居易と長安・洛陽」（『白居易研究講座』第一巻、一九九三年、勉誠社）に指摘、考察が為されている。

この論文は、『中国文史論叢』第８号（下定雅弘教授退休記念号、2012 年 3 月）に寄稿したものです。原稿なので、発表されたものとは字句に違いがあるかもしれません。［論著等とその概要］の［学術論文］の№33 に挙げたものです。